

あんよ、いたいの？

並木 美砂子

六年ぶりのアジアサイだ。やつと会いに来ることができた。ここは、多摩動物園のなかほど、アジアゾーンの一角だ。いっしょに手をつないでやつてきた娘は、まだ二歳。連れてくるのに精いっぱいだったが、サイは彼女のお気に召すだろうか。

ゲートをくぐりゆっくり歩いて十五分ほど、やつ

サイに会える。「久しぶりだね」心の中で挨拶した。あの時いたメスのサイは、すでに天国に召されてい

た。残されたオスは寝室の中だった。運動場には「捻挫のためしばらくお部屋にいます」と書かれた小さな看板。

「ふうん、今日はお部屋なんだって」看板を見たお客様が、つまらなそうにちょっと部屋を覗いては立ち去っていく。娘を抱き上げて、部屋がよく見えるような場所に行つた。

通路のガラス窓の向こうに、彼は立っていた。その観客通路とサイとの間には太い太い鉄の棒（つまり、

檻) があるけれど、棒と棒の間が二〇センチもあいているので、よく見える。ちょうど飼育係が部屋を洗い流しているところだった。

「あんよ、いたいいたいなんだって。だからね……」

私は、娘にどうしてプールのある広い運動場にサイがないのかを説明しようとしたが、どうやらその必要はなかつたらしい。というより、彼女にとつて「サイ」が自分からわずか二メートルあまりのところに「いる」ことが、今問題なのだった。

彼女は微動だにしない。文字どおり目を「まんまるく」してサイに見入っている。手はぎゅうっと握りしめたまま、視線は顔に向けられていた。それを知つて私も彼にじっくり見入ることにした。

「鎧」と称されるその皮膚の深いひだは、何とも例えようのない、渋い「土色」だった。草を噛みしめる度に、体はかすかに揺れ、ひだの折れ具合が微妙に変わり、普段は見えない柔らかそうな肌色の皮膚が、ひだの内側に見えかくれする。固い金属の鎧などとは大違

い。弾力に富んだ、厚みのあるれつきとした皮膚なので、彈力に富んだ、厚みのあるれつきとした皮膚なので、

だつた。

サイらしさを象徴するそのツノは、固くしまって頭の方に湾曲し、いかにも重そうである。それを支える首から肩にかけての筋肉は「鎧」の中にしつかりとしまわれているものの、草を噛みしめると、はずむようにリズミカルな動きをみせている。

ツノの組成は、どちらかというと「皮膚」ではなく、体毛やツメの成分に近いそうだ。よく見ると、縦に何千もの糸のような組織が互いにしつかりくつついで「ツノ」の形を作っているのがわかる。こうした特殊なツノはもちろんサイ特有のものである。

私は娘とともにしば

らくこのサイから目を離すことはできなかつた。



やがて、室内の清掃

を終えた担当の飼育係が、彼に何かやさしく声をかけながら、サイのすぐ横にやつて来た。それがあまりに自然な光景だったので、まるで、これからお乳を搾るために雌牛の脇に腰を下ろす農夫のように見えた。

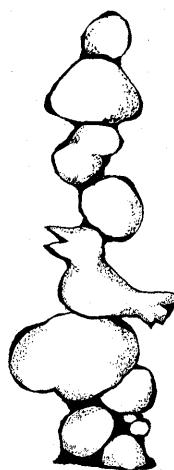
よく、「野生じゃない動物は本物じゃない」とか、「動物園の動物は不自然でかわいそう」などと言う人はいるけれど、私は、サイやカバなど大きな動物に、人間が接近し接触できるのは、ひとつの「技術」として見るべきだと思う。そういう関係を動物との間に持つことができるのは、ひとつの文化だと。

その飼育係は手に薬を持っていた。クリーム状の薬

をチューブから出して、左後ろ脚に塗るのだった。まるで造作のない自然な光景だった。みとれてしまつた、としか言いようがない。だまつて、サイは脚に塗

らせていて。その間、飼育係はずっと優しく声をかけ続けていた。その内容は聞き取れなかつたが、どんなに観客が近くですつとんきょううな声を上げても、興奮もせず、じつと立つて薬を塗らせていたのは、その飼育係の声やしぐさのおかげに違ひない。

「あんよ、いたいの？」娘はサイに話しかけている。サイの捻挫のおかげ、と言つては申し訳ないが、実際、こんなにも間近でサイの姿に接することができた



のは、確かにこの捻挫の故である。

動物園で飼育していれば、こうしたアクシデントもたまにはあるだろう。そして、時には飼育係と動物との絶妙な信頼関係をかいだ見ることもできる。もちろん、当の動物はこんな楽しみ方を許してはくれまいが……（ごめんなさい）。

さて、薬を塗られたサイは、相変わらず黙々と草の山に顔を埋めてそれを食べている。器用に口先を、つまり唇の部分を細く前に突き出して、山を少しづつ崩していく。山はだんだん嵩を減らす。むしゃむしゃといふか、ごそごそといふか。草を唇でかき分ける音、奥歯で噛みしめる音、そして時たま聞こえる鼻息、それらがコンクリートで被われた部屋に響く。まさに圧巻だ。

ゾウが、その長い鼻で草を巻きとつて口に運ぶのは、道具を使って食べ物を口にしているように見えるが、それに比べ、サイが草の山に口を直接つけて一心

に食べ続ける様子は、どことなく哀愁を帯びている。

それはおそらく、生きることと食べることだが、イコールの記号で結ばれている「生命」の切なさを実感させるからに違いない。人間の「生」も、多かれ少なかれこうした地球上の生き物たちと共に通の運命を持っているからに違いない。理屈抜きでそれを感じしる。

となりには同じ大きさの部屋が並んでいた。メスのサイのものだったことは容易に察しがつく。ぱっかりと空いた空間。何十年もそこに住んでいたことをうかがわせる、表面の少しはげたコンクリート。壁にはツノや体をこすりつけたのであろう、汚れが黒光りしている。

どんな思いで飼育係はメスの死を受け入れたのだろうか。

同じように、はげた床や汚れた壁は、そのメスに長い間連れ添つてきたこのオスのサイにも、そんなに遠くない将来、同じ日が訪れる事を思わせる。

なにせ、数百キロはある巨体である。太い四本の脚がそれを支えているのだ。たとえ一本でも具合が悪いと、他の脚にも影響し、不自然な姿勢をとらざるえないだろう。ちょっとした弾みにつまずいたり、起き

あがれなくなってしまったたらどうしよう。血流障害を起こしやしないだろうか……次々に不安がよぎる。

この二年後、私はアジアサイの担当の飼育係にお会いする機会を持った。オスは、足を痛めて以来健康状態がすぐれず、亡くなつたそうだ。その飼育係のかたは、動物園の雑誌にかつてこんなことを書いていた。
「高齢のサイたちにも、なんとか豊かな飼育環境を提供し続けたい。動物園だからこそそれができるし、しなければならない」と。彼は私が尊敬する飼育係のひとりである。

アジアサイは日本の動物園には数えるほどしかいない。もちろん世界中の動物園でも飼育数が少ない。地球上で絶滅の危機を迎えている種類のひとつだ。アフ

リカのサイたちも同じ境遇にある。そんな遠い地で生きている動物たちからのメッセージも、目の前の動物たちから受けとめていかなければと思う。

「あんよ、いたいいいたいしたの？」娘は今度は自分の足をさすっている。飼育係が薬を塗るような手つきで。そして最後にこう言った。「いたいのいたいの、とんだけー」私も同じ気持ちだった。どこかにとんでいくつてくれれば……。
サイは変わらず草を食べ続けている。

(千葉市動物公園)

